

妊症に於ける卵巣卵管障害、更には経度の癒着剝離、試験組織診の可能性等診断の確定、治療方針の確立に試験的開腹に代るものであり又患者に対する侵襲も少ない点、今後更に広く応用さるべき価値の高いものである事を強調したい。

5. 婦人科領域における腹腔鏡の応用について

(北農病院) 後藤 史郎

婦人科領域における補助的診断法の一つとして腹腔鏡の応用を試みた。その中から、性器結核疑の患者の下腹痛が、骨盤のうつ血と癒着によるものであることを認め

た例、広汎な癒着の予想される患者の癒着の位置と程度を術前に知ることにより手術を円滑に進めた例、排卵や黄体を観察して不妊症への応用を示唆された例、卵巣腫瘍や腹水を確認した例、原因不明の腹痛が、二次性月経モリミナによることを診断した例、など幾つかの症例を示し、婦人科領域における補助的診断法としての、腹腔鏡応用の意義について考察を加えた。腹腔鏡の有意な点を利用することにより、婦人科領域の診療内容を大いに充実させうるのではないかと考えている。

第2群 内 分 泌

6. 産婦人科領域の Triosorb による甲状腺機能検査 (第1報)

(信大) 岩井 正二, 福田 透
清水 勲, 古田 孝文

甲状腺機能検査法には現在迄多数の方法があるが、最近更に ^{131}I 標識 Triiodothyrosine Resin Sponge による検査法が発表され各方面より注目されつつある。本法は特に放射性汚度を被検者に直接投与しないで実施できる点に大きな利点を有し、妊婦等が対象となり得る我が領域では真に好都合な検査法であるが、我々も信大産婦人科に入院或は来院せる各種患者 184名 (妊婦93例、切迫流早産20例、不妊症20例、等々) に就き本法を試行したので、現在迄の成績に就き報告する。

即ち妊婦では一般に妊娠3カ月後では対照に比し低値をとるものが多いが妊娠月数とは特に関連性はなく、中毒症例では正常例に比し更に低値を示す例の多い事を認めた。

切迫流早産例における本検査の応用価値に関して今後更に慎重なる検討を要するものと考えられた他、不妊症例では特に対照と著差が認められなかつた事等も興味深い事と思われた。

7. Gonadotropin 負荷試験による尿中 Estrogen 分画値の動揺と月経異常の治療について

(阪大) 足高 善雄, 倉智 敬一
青野 敏博, 宮田 順

月経異常婦人の病態を内分泌学的にうかがう目的で、各種月経異常婦人47例と正常月経婦人4例の計51例に月

経又は出血の4日目より PMS 2000 I.U. と HCG 1000 I.U. を連日3日間投与した。投与前日の24時間尿より estrogen (E), pregnanediol (PG), total gonadotropin (total G), 17-OHCS, 及び 17-KS を測定し、投与開始後の各24時間尿より E, PG. を測定した。

尿中 E は G 投与開始後6日目 (第6尿) にピークを示して増加する例と、全く増量を示さない例に分類でき、第6尿のE値より $40\mu\text{g}$ 以下を無反応型、 $41\sim 60\mu\text{g}$ を低反応型、 $61\mu\text{g}$ 以上を正常反応型と定めた。月経異常の種類別に無反応型の占める率の多いものから並べると機能性出血—無月経—無排卵性月経—正常月経の順となる。

E の分画比即ち estriol + 16-epiestriol/estradiol + estrone 比はG負荷後に正常反応型のみが低下の傾向を示した。

種々の治療により正常反応型の14例中12例が排卵し、うち5例は妊娠の成立をみたが、なかでもG療法により11例中9例に排卵の誘発をみた点が注目される。一方無反応型は治療により10例中2例が排卵を来したのみで、G療法による排卵誘発率も低かつた。

以上より、G負荷試験は卵巣機能検査法として有用であり、本試験により正常反応型と判定された例はG療法の適応となることを明らかにした。

8. 合成 Gestagen の線溶現象に及ぼす影響 (名大)

石塚 直隆, 川島 吉良, 加納 泉
寺尾 俊彦, 竹内 忠倫

機能性子宮出血に対し止血効果をもたらす合成 Gesta-

gen の止血機序を検索するため、合成 Gestagen 投与時の子宮内膜及び末梢血線溶活性を標準並びに加熱フィブリン平板法を用いて測定した。

1) 正常性周期婦人の子宮内膜線溶活性は卵胞期に比し黄体期に活性がやゝ高く、末梢血線溶活性は両者の間に差異を認めない。

2) 機能性子宮出血患者の子宮内膜線溶活性は正常性周期婦人に比べ、明らかに高い。末梢血線溶活性は1例を除いて正常範囲内にある。

3) これら機能性子宮出血患者に nor-ethisterone 20 mg/d 5日間投与したときの子宮内膜線溶活性は著明に抑制されて居り、消褪出血時には又活性が上昇し、消褪出血止血後では若年期出血の1例を除いて正常範囲内にある。末梢血線溶活性については whole plasmin についての変動は認め得ないが free plasmin については投与終了時に明らかな抑制を認めた。

4) 実験的に健康男子並びに去勢婦人に nor-ethisterone 20mg/d. 5日間投与時の末梢血 plasmin 活性は投与直後に whole plasmin の上昇、free plasmin の抑制を認めた。日をおつて投与前の値にもどる。

5) 各種 steroid hormone をフィブリン平板内に添加し、子宮内膜線溶活性を測定したところ、testosterone 及び nor-ethisterone で著明な抑制を認めた。

以上合成 Gestagen は子宮内膜組織activator を著明に抑制し、又末梢血 plasmin 活性もその投与初期にかなりの変動をしめした。この様な線溶現象の抑制が止血機序と何らかの結びつきがあるのではないかと考え、今後更に研究をすすめたい。

9. 婦人科手術後の乳汁分泌現象について

(神鋼病院)

岩橋 五郎, 堀田 淑子, 楠部 国泰

私はかねてより、妊娠に全く関係ない婦人科手術後、

しばしば乳房より乳汁の分泌が認められることにきづいていたが、今回統計をとって検討してみたので報告する。こゝで私のいう乳汁分泌とは、産褥時の如く大量の分泌をさすのではなく、診察のさいに指に触れる乳房に硬結を触知し、乳嘴の方向に圧すれば乳汁が排出される程度で、患者の多くは自覚せず、他覚的にみとめる場合が多い。調査対象は18才より65才までの妊娠に関係のない手術をうける患者99名につき、術前乳汁分泌のないことを確かめ、術後毎日廻診のおり、分泌の有無を検討した。

1) 術後乳汁分泌を認めたのは、99例のなかで55例で、約54%である。

2) 閉経期以後の患者にはこの現象がない。

3) 疾患とは関係ない。

4) 未産婦か経産婦か、初潮の時期とは何ら関係ないが、黄体期に手術したものが多い。

5) 乳汁分泌の開始は、術後2～10日目(平均5.3日)からで、その持続は7～14日間であつた。

6) 乳汁の成分は、分泌開始時には産褥のごとく初乳球をみとめ、徐々に成乳のような所見に移行したが数例において、最初から成乳に近いものがあつた。

7) 腹式手術の方が腔式に比し多い。

8) 手術により両側卵巣を剔出したもの、片側をのこしたもの、両側ともこしたものに分ち検討したが、片側のみのこした症例にやゝ乳汁分泌を証明するものが多い。

9) しかし卵巣に全く触れない Franz 氏手術においても高率にみとめられた。

10) 乳汁分泌の原因については、産褥時胎盤を失うために生じる Sterod 喪失による下垂体優位に似た機転と、開腹時のショックが下垂体副腎皮質系に影響を与えるものと推定されるが、このような事実のあることを報告したい。

第3群 感 染 症

10. 尿および腔分泌物の細菌学的検査成績

(東京女子医大)

川上 博, 大内 広子, 徐 京子

笹本 佳子, 井口登美子, 原 君代

相羽早百合, 重松 明子

1962年1月より1964年8月まで、東京女子医科大学病院産婦人科における褥婦、一般手術患者、癌患者のうち特に細菌検査の要ありと認めたものの尿および腔分泌物検査成績について調査した。尿路感染の検出菌株は、大腸菌、白色ブドウ球菌、gram 陰性桿菌であつた。癌患